様 式 C－19、F－19－1、Z－19 （共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 29 年　 6 月 13 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０２１６

研究課題名（和文）日本古典文学における続編の機能の基礎的研究

研究課題名（英文）Research on Sequil of Japanese Pre-modern Literature

研究代表者
千本　英史（Chimoto, Hideshi）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：５０１８８４８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）： 日本の古典文学における「続編」については、「続」の名を冠したものは、平安～鎌倉期の散文においては、ほとんどその例をみない。当初続編としての分析を期待した「続うつほ物語」も「続今昔物語」も、「続編」ではないことが確認された。それだけに、作品作者以外の人物があえて続篇を書く場合は、正編の作者や作品について、強い継承の意識が存在することが明らかである。
近世期では、「続無名抄」や「続徒然草」など、中世の文人を思慕しての「続編」が作られたが、これらの例は近世の「偽書」の場合と共通する要素が大きい。

研究成果の概要（英文）：There are few sequelsin prose work (which has the name of "zoku")   of Heian ～Kamakura period. Although I was planning to study "Zoku Utsuho Monogatari" and "Zoku Konjaku Monogatarishu", I confirmed that neither work is a sequel.When a person other than the author dares write a sequel, there is strong consciousness of inheritance about the author and the work.
In the early modern era(edo-period), "sequel" was created by longing to the hermit in medieval ages, such as "Zoku Mumyosyo" and "Zoku Tsureduregusa". Many of these works have much in common with the case of "forgery" of same period.

研究分野：日本古典文学

キーワード：続編　日本古典文学

１．研究開始当初の背景

（１）これまで研究代表者は、三度にわたって「偽書」をテーマとした科学研究費補助金による研究を許され（「東アジア地域における古典作品偽書の比較文化的研究」(2009－2012)、「日本古典文学における偽書の展開の研究」(2004－2007)、「日本古典文学における偽書の系譜の研究」(2000－2002))、文学的営為を受容するとはどういうことか、文学的営為が受け継がれていくにはどのような「条件」が必要とされるのか、考察を進めてきた。今回はその研究を引き継ぐ形で、「続編」の機能について考察を進めようとした。

（２）「続編」はたんなる模倣にすぎないのではない。西欧での事例ではあるが、たとえばフランス中世文学の集大成とされる「バラ物語」は、ギヨーム・ド・ロリス(生没年未詳)によって4000行に上る作品が書かれた後を受け、聖職者にして学者で詩人のジャン・ド・マン(1240-1305 頃)によって、ロリスの枠組みを継承しつつ、内容を異にする18000行に及ぶ「後編」が書かれ、それが前編以上の人気を博し、賛否両論の議論をひき起こしたのだという(饗庭孝男他『新版フランス文学史』1992)。日本の古典文学の分野でのそうした動きの解明に繋げようと企図した。

２．研究の目的

（１）ひとつの作品に対してその作品世界を踏まえつつ、別の作者が新たな文学作品を創作した代表例として、『源氏物語』の<続編>としての『山路の露』『雲隠六帖』があげられる。三田村雅子氏は、この二作品の質的差異について『日本古典偽書叢刊』第二巻月報に寄せられた論の中で、的確に指摘された。同じ作品を受容した続編にあっても当然のことながら、その作者主体と環境とによってまったく違った受容のあり方が成立するのであり、その点を詳細に検討することが、文学作品の受容史、ひいてはその元となった文学作品検証の有効な方法となる。

（２）先行作品を受け継ぎながら、あらたなジャンル展開を遂げた代表的な例としては、慶滋保胤の『日本往生極楽記』を嗣いだ大江匡房の『続本朝往生伝』があげられる。１０世紀末に、日本で初めての往生伝として作られた『日本往生極楽記』は、唐代の『浄土論』『往生西方浄土瑞応刪伝』などの先蹤はありながら、直接には勧学会や保胤自身が主導した二十五三昧会といった念仏結社運動の中から生み出された実践報告の書としてあった。しかしながらそれから一世紀以上を経て、学儒大江匡房の編した『続本朝往生伝』では、著作の背後にそうした具体的実践運動は確認しえない。にもかかわらず、摂関期から院政期にかけての一世紀の年月の経過は、浄土思想の深化をもたらさざるを得ず、匡房の著作のあと、三善為康『拾遺往生伝』以下、短期間に矢継ぎ早に文人たちによる往生伝が編纂されるという事態を招来した。社会状況の変化の中で続編の出来が要請される様が見てとられるべきである。ここから文学と社会との相関関係を見つめることができる。

３．研究の方法

（１）偽書研究において指針となった、速見行道(1822-96)の『偽書叢』や小宮山綏介(1829-96)の『偽書考草案』といった近世後期の基礎的業績・リストのような書物は、「続編」については発見できていない。また偽書についての研究途上で見出し得た市島春城の「日本の偽書大概」(台湾愛書会『愛書』第三輯 1934.12)といったような、近代に入

っての概観的研究も管見に入らない。そのため、まずは『国書総目録』などを利用しつつ、各文庫目録などを参照して、日本古典文学における続編の概要を示す必要がある。その上でこれまであまり取り上げられることのなかった続編作品について、その文学史上の基礎的整理を行い、具体的な内実を報告する。

（２）これまで作品としては一定研究が進められてきているが、「正編」と「続編」とにどのような相違点があるのか、その相違点は何によって生じたものなのか、といった観点からはさほど解明の進んでいない作品がある。天福元年 1233 に、南都楽所の左舞手の狛近真の手になった楽書の『教訓抄』に対し、その孫の狛朝葛の著した『続教訓抄』(1270～1322?)については、本文に問題の残ることもあって、研究論文は激減してしまう。また両者を比較検討しての論はきわめて限られている。またこれまで研究の一定蓄積がある作品について、近世期の随筆資料などを追跡し、続編制作と同時代に近い時点での評価について整理をこころがける。

（３）さらに実際には研究者の体調管理の問題があり、初年度を除いては実現がかなわなかったが、計画段階では、韓国とベトナムの二カ国に限定してではあるが、東アジア諸国での調査と漢字文化圏での「続編」のあり方の研究を予定していた。

４．研究成果

（１）「方法」の項でも述べたように、「偽書」研究の時とは違って、歴史的に「続編」を通観したような先行論文も見いだせず、また書目リストも発見することができなかったので、『国書総目録』他について、「続」の字を冠した作品を抽出することから作業を始めた。全体的にいって、「続」字を冠した作品が予想外に少数に留まることが確認された。

研究構想でも触れていた『源氏物語』の「続編」は、それぞれ『山路の露』『雲隠六帖』といった独自の名称を持っていて、『続源氏物語』とは称していなかったし、後段十巻が別人の手になるとされる『栄花物語』は、「正編」「続編」で分かたれることなく、全体として『栄花物語』の名を有している。例外として、勅撰集に「続」「新」の名がよく見られるが、これは「元」の権威が確立しているからに他ならない（『古今集』の権威が揺るがない故に『新古今集』の成立が期待される）。下調べ段階で期待していた『続宇津保物語』は、神宮文庫本は通行の『宇津保物語』そのものに他ならず、高山郷土館本は「続」ではなく「読」「宇津保物語」で、物語の語彙についての解説書の類であった。無窮会図書館と三井バークレーの『続今昔物語』はいずれも『今昔物語集』巻二十五の流布本系の写本である。なぜ「続」の語が冠せられたのかは不明。『続落久保物語』は漢詩文を含む江戸期の作品で、内容的に『落窪物語』とは接続していない。総じて平安期の作品に「続」字を冠したものにあって、本人以外の人物が続編として書いている散文系の作品は見いだすことが困難であった。

（２）それ故にこそ、平安期以外のそれにあっても、あえて「続」字が冠せられた場合には特別な意味づけがなされていると考えられる。『続教訓抄』は、著者狛朝葛が祖父の狛近真の著した『教訓抄』に倣うことを眼目にして著した作品であることが明らかだが、諸本の整理も含めてまだ解明すべき点が多い（本科研終了近くになって神田邦彦氏の『中世楽書の基礎的研究』2017 が刊行され裨

益されるところが少なくない）。島原図書館松平文庫の調査で、巻二十二の孤本ではあるが、善本と思われる写本の写真撮影を許可いただいたので、大阪府立中之島図書館石﨑文庫本（同じく巻二十二のみの孤本）、賀茂別雷三手文庫本、国会図書館本、京都大学大学院文学研究科図書館本『続教訓抄』の同巻と比較する作業を継続している。おなじく「続」字を冠した『古事談』『続古事談』の関係については、余裕を確保できず、今回対象とした諸作品の中では比較的研究の蓄積が多いにもかかわらず、それらの先行諸研究を追うことができず、分析をすることがかなわなかった。今後の課題としたい。

松平文庫調査で写真撮影を許された『淡海記』については、内閣文庫蔵の『江濃記』古写本の前半部分と一致することが確認できた（版本も存在し、『群書類従』合戦部に翻字もされる）。『江濃記』は前半の「佐々木両家わかりの事」以下六項目が漢字平かな交じり文で書かれ、「土岐殿事」以下七項目が漢字カタカナ交じり文で書かれ、文体からしても前半後半に二分割される。名古屋市立鶴舞中央図書館に『続淡海記』と題する写本が蔵されていることがわかっていたので、当該本と『江濃記』後半とが一致するのではないかと期待したが、結論的にはまったくの別本であった。ただしなぜ『続淡海記』の名を持つのかは不明であり、『江濃記』については『浅井三代記』との関連なども指摘されており、成立などについてさらに考察したい。中世のいわゆる「隠者文学」の系統を引く、『続無名抄』（岡西惟中『消閑雑記』）・『続徒然草』（清水春流『睡余操筆』）については、ともに先人の遺風を思慕する江戸期の述作であり、近世期における「偽書」のありかたと通底する要素が認められる。後者の作者清水春流には『徒然草新註』（寛文七年刊）の著もあり、中世の文筆が近世にいかに受け継がれていくか、今後も調査を進める。

（3）以上のようなさまざまな続編のありようを考察するために、諸外国における例との比較や、近代日本における「続編」のありようを振り返ってみることは意味が大きいと考えられる。

ヴェトナムにおける『公餘捷記続篇』（『公餘捷記』の「続篇」）、『馬麟佚史』（『嶺南摭怪』の「続篇」）、韓国における『三綱行実図』の問題（我が国の浅井了意の翻訳も問題も含む）など、多くの手がかりを得ながら、ほとんど調査に着手できずに終わったことは反省しなければならない。

日本近代の「続篇」との比較を考えると改めて、作品の「受容」のありようの差違こそが問題であり、そこに作品が生み出される機構（出版体制など）の影響が大きいことに気づく。全体として、「偽書」に引き続いて「続篇」という切り口が受容論の構築の上で、有益な方法であることを再確認できた研究であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①千本　英史、宗教と文学覚え書き　その一、奈良女子大学大学院人間文化研究年報、査読無、30 号、2014、pp 125－132.

②千本　英史、鴨長明と『方丈記』、熊楠 Works、査読無、41 号、2013、pp 24－28

〔図書〕（計３件）

①千本　英史　他、勉誠出版、集と断片類聚と編纂の日本文学、2014、409（pp.59－76）

②千本　英史　他、ミネルヴァ書房、日本文学史　古代・中世編、2013、389（pp.165－178）

③千本　英史　他、中世文学と隣接諸学９『中世の物語と絵画』、2013、501（pp.425－448）

〔その他〕（計１件）

①千本　英史、西郷信綱著作集第９巻月報、『日本古代文学史』元版・改訂版の切り貼り対照表、2013、平凡社

６.研究組織

(１)研究代表者

千本　英史（CHIMOTO, Hideshi）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：50188489